

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320115

研究課題名（和文） 新自由主義の歴史的展開に関する比較史的考察

研究課題名（英文） Comparative Studies on the Historical Development of Neoliberalism

研究代表者

小沢 弘明（OZAWA HIROAKI）

千葉大学・普遍教育センター・教授

研究者番号：20211823

研究成果の概要（和文）：

本研究は、歴史学の立場から新自由主義時代を把握し、新自由主義の同時代史的分析にとどまらず、古典的自由主義時代からの連続面と断絶面の双方を明らかにした。また、新自由主義の世界史を構想するさいの方法として、新帝国主義という視角を検証し、それが構造化の特徴を把握するさいに有効であることを確認した。また、社会史研究、ファシズム研究の方法を新自由主義の研究に応用する視点を確立した。

研究成果の概要（英文）：

We were engaged in not only investigating the contemporary history of neoliberalism, but also analyzing the historical continuity and discontinuity from the age of classical neoliberalism. We insisted on the importance of introducing the concept of neo-imperialism into the study of world history of neoliberalism. Historical methodologies, such as social history and comparative fascism, are effective for the detailed study of neoliberalism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
20年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
21年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
22年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
総計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：東欧近現代史・新自由主義・世界史・新帝国主義

1. 研究開始当初の背景

- (1) 新自由主義の世界史に関する分析は、世界的に見ればマクロの分析を行う地理学、ミクロの分析を行う人類学という学問分野によって担われてきた。
- (2) 歴史学の分野では新自由主義時代という把握は生まれつつあったが、新自由主義の時代像(古典的自由主義の時代からの連続と断絶)を明確にしたものは少なかった。
- (3) また、研究方法(新自由主義時代を歴史的に分析する方法)面でも未開拓の分野が

多く存在した。

2. 研究の目的

- (1) 本研究では、時間軸の観点からは、18世紀末からの世界史の展開を古典的自由主義の時代、社会的自由主義(介入的自由主義)の時代、新自由主義時代の継起的展開ととらえ、特に三者の連続面を把握することを目的とした。
- (2) 空間軸の観点では、古典的自由主義の時代の自由貿易帝国主義、社会的自由主義の時代の古典的帝国主義、新自由主義時代の新帝国主義という対応関係から、世

界の構造化の歴史的変容を把握することを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) マクロ分析では、自由貿易帝国主義と古典的帝国主義についての研究蓄積を踏まえ、新たに新帝国主義という分析視角を確立し、その方法を使って「周縁」諸地域を分析した。
- (2) ミクロ分析では、地域における社会変動を生活世界の視点から再構成するため、社会史の研究手法の応用につとめた。
- (3) 新自由主義の世界化の要因のひとつを、その同意調達機能に求め、それを分析する方法として、ファシズム論の応用を試みた。新自由主義の分析には、特にフーコーの権力論やグラムスのヘゲモニー論に注目が集まっていることを考慮に入れ、その歴史研究への導入の可能性を検討した。

4. 研究成果

- (1) 新自由主義時代を同時代史として分析するために、新自由主義の思想(1930～1940年代)・運動(1940年代～1970年代)・体制(1970年代～現在)を歴史的に捉える視点を確立した。亡命期の思想とモン＝ベルラン協会の設立、第二次世界大戦後のシンクタンクの運動に注目した。
- (2) 新自由主義時代を広く、古典的自由主義の時代からの連続面で把握するさいの視点として、自由主義の排他性、女性の周縁化、国民主義との相補性、帝國的自由主義などの分析視角を確立した。
- (3) 歴史的な社会運動の意義と限界を把握するなかで、とくに反自由主義の諸運動を取り上げ、それと現代の反グローバリズム、反新自由主義の運動との歴史的照応関係を把握した。
- (4) 歴史学の方法による新自由主義の分析視角をもとにして、世界史把握の方法、「韓国併合」百年と歴史認識の方法、新帝国主義時代の植民地研究の特徴、中東・北アフリカの社会変動と新自由主義との関係、多文化主義政策と新自由主義などについての論考を発表した。
- (5) 新自由主義という歴史的時代をもたらした資本主義の構造転換を産業資本主義から知識資本主義(情報資本主義)への転換と捉え、大学や高等教育の変容の背景にある知識資本主義の特徴を明らかにした。
- (6) 新自由主義の主題に関連する図書、論文、映像資料の書誌をデータ化し、ウェブ上で公開した。

(7) 社会貢献の一環として、千葉大学、東京外国語大学、カナダ大使館で新自由主義に関連する映像資料の上映と解説を主催し、質疑応答を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 32 件)

1. 小沢弘明、「新自由主義下の中東・北アフリカ」(総特集 アラブ革命 チュニジア・エジプトから世界へ)、『現代思想』、査読無、39 卷 4 号臨時増刊号、2011、pp.220-223
2. デイヴィッド・ハーラン著、小沢弘明訳、「40 年後の「歴史の重荷」(ヘイドン・ホワイト的問題と歴史学)」、『思想』、査読無、第 8 号No.1036、2010、pp. 73-95
3. 小沢弘明、「大学の世界史」、『歴史地理教育』、査読無、754 卷、2010、pp.56 - 57
4. Hiroaki Ozawa, “ Domination by 'money power': one year after the corporatization of national universities” , 査読有、10-2, 2009, pp.181-190
5. 小沢弘明、「ベトナムにおける国民国家と新自由主義をめぐる覚書」、『ハノイ・シンポジウム ベトナムにおける国家と民族』、査読無、2009、pp.17-21
6. 小沢弘明、「エトノスから見た帝国と国民国家—ハプスブルク帝国と後継諸国の事例—」、『シンポジウムユーラシアと日本 いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来—報告書—』、査読無、2009、pp.42-47
7. 小沢弘明、「国立大学の「選択と集中」—運営費交付金削減の現在」、『現代思想』、査読無、36 卷 12 号、2008、pp.154-163
8. 栗田禎子、「「大統領」の解体 ヒルミー・シャラビー」(総特集 アラブ革命 チュニジア・エジプトから世界へ) (エジプト革命 資料編)、『現代思想』、査読無、39 卷 4 号臨時増刊号、2011、pp.259-262
9. 鶴飼哲・臼杵陽・栗田禎子・長沢栄治、「討議 サウラの時に アラブ世界の大転換」(総特集 アラブ革命 チュニジア・エジプトから世界へ)、『現代思想』、査読無、39 卷 4 号臨時増刊号、2011、pp. 60-81
10. 栗田禎子、「エジプト「民衆革命」の意味するもの」(総特集 アラブ革命 チュ

- ニジア・エジプトから世界へ)、『現代思想』、査読無、第39巻 第4号臨時増刊号、2011、pp.46-51
11. 栗田禎子、「世界の潮 南北「ふたつのスーダン」を待ち受ける課題」、『世界』、査読無、3月号No.814、2011、pp.29-32
 12. 栗田禎子、「エジプトで開始された「我々の革命」」、『金曜日』、査読無、19巻7号、2011、24-25
 13. 栗田禎子、「「中東」論の現在 「大中東」構想と「イスラーム世界」論のはざまで」(特集 シンポジウム 地域世界論の新地平)、『メトロポリタン史学』、査読有、6号、2010、pp.23-35
 14. 栗田禎子、「スーダン最後の選挙 「国際社会」が強いる独裁と分裂」、『世界』、査読無、7月号No.806、2010、pp.232-239
 15. 栗田禎子、「イラン革命の30年—分析のためのいくつかの視覚 (特集 イラン—革命から30年目の危機)』、『アジア研ワールド・トレンド』、査読無、15巻10号、2009、pp.6-9
 16. 栗田禎子、「歴史の眼「海賊対処法案」の位相」、『歴史評論』、査読有、712号、2009、pp.84-88
 17. 栗田禎子、「パレスチナ問題とは何かいま、何をせねばならないか」、『平和運動』、査読無、461号、2009、pp.4-11
 18. 栗田禎子、「テオドール・ロートシュタインに関する覚書—エジプト民族運動・イギリス労働運動史・ソヴィエト外交』、『イスラーム地域研究ジャーナル』、査読無、1号、2009、pp.37-44
 19. 栗田禎子、「「移行期」のスーダン政治—南北和平・民主化・ダルフール危機」、『地域研究』、査読有、9-1、2009、pp.68-89
 20. 栗田禎子、「スーダン情勢の構造と自衛隊派遣問題」、『世界』、査読無、9号、2008、pp.29-32
 21. 栗屋利江、「インド近代史研究と「植民地責任」論」、『歴史学研究』、査読有、865号、2010、pp.22-26
 22. パルタ・チャタージー著、栗屋利江共訳「サバルタン・スタディーズ」略史、『月刊「みすず」』、査読無、571号、2009、pp.8-20
 23. 鈴木茂、「ラテンアメリカの民主化と社会運動」、『歴史評論』、査読有 697号、2008、pp.19-33
 24. 橋川健竜、「一九世紀前半のアメリカ合衆国における農村型事業の変質 ニュージャージー州南部の製鉄所における労働管理」、『千葉史学』、査読有、55号、2009、pp.13-28
 25. 橋川健竜、「書評 油井大三郎『好戦の共和国アメリカ 戦争の記憶を

- たどる』、『アメリカ太平洋研究』、査読無、9号、2008、pp.210-215
26. 橋川健竜、「特集:アメリカ太平洋とイギリス帝国「コメント」」、『アメリカ太平洋研究』、査読無、9号、2008、pp.60-61

[学会発表] (計14件)

1. 小沢弘明、「知識資本主義・大学・歴史教育」歴史学研究会総合部会「転換期の大学における歴史学」、青山学院大学、2010年7月10日
2. 小沢弘明、「新自由主義の世界史と高等教育改革」、比較教育社会史研究会2009年春季大会、日本大学、2009年3月28日
3. Yoshiko Kurita, Wilfrid Scawen Blunt, His middle Eastern Friends, and the Discovery of 'Imperialism', World Congress for Middle Eastern Studies, Barcelona, 2010年7月21日
4. 栗田禎子、「スーダン国内の「周縁化された諸地域」に対する弾圧の歴史とその克服の展望」、日本国際政治学会2008年度研究大会、つくば国際会議場、2008年10月26日
5. 栗田禎子、「「スーダン情勢に関する緊急研究集会」の組織および報告」、緊急研究集会「いま、スーダン情勢を考える」、学術総合情報センター、2008年7月28日
6. 栗田禎子、「スーダンというトポス—植民地支配・周縁化・革命」、千葉県高等学校教育研究会 歴史部会研究大会、千葉県立中央博物館、2008年6月27日
7. 栗屋利江、「英領期インドのメディア広告分析—20世紀前半における消費への「誘い」」、日本南アジア学会第22回大会、北九州市立大学、2009年10月4日
8. 栗屋利江、「「植民地近代性」を考えることとは?」、日本南アジア学会設立20周年記念連続シンポジウム第6回、東京大学、2008年6月23日
9. 橋川健竜、「18世紀ブリテン帝国の戦争と先住民の表象—モホーク族の凶像を中心とする序論」アメリカ学会、2009年6月7日、津田塾大学、
10. 橋川健竜、「アメリカ太平洋とイギリス帝国 (コメント)」、CPAS公開シンポジウム、東京大学、2008年9月13日
11. 秋葉淳、「19世紀オスマン帝国における改革と抵抗—アナトリアの事例から—」、シンポジウム「国民国家形成期の民衆運動と政治文化」人間文化研究機構・アジア民衆史研究会共催、明治大学、2008年11月29日

〔図書〕(計17件)

1. 国立歴史民俗博物館編 小沢弘明、「新自由主義・新帝国主義・韓国併合」、『「韓国併合」100年を問う:2010年国際シンポジウム』岩波書店、2011、(pp.319-324)
2. 伊集院立・小沢弘明・日暮美奈子編 西川正雄、『歴史学の醍醐味』、日本経済評論社、2010(総358ページ)
3. 粟屋利江、「ケーララ(インド)におけるクンマーティの歴史的・社会的位相を考える」、『アジアの無形文化における仮面の研究—仮面との比較から』、立教大学アジア地域研究所、2011、(pp.104-113)
4. 国立歴史民俗博物館編 粟屋利江、「インド人知識層の「韓国併合」認識をめぐって」、『「韓国併合」100年を問う』、岩波書店、2011、(pp.263-274)
5. 粟屋利江・松本悠子編 粟屋利江、「「女児の命」をめぐる闘争—英領期インドにおける女嬰殺しをめぐる」、『人の移動と文化の交差』ジェンダー史叢書7、明石書店、2011(pp.183-202)
6. 竹村和子・義江明子編 粟屋利江、「女たちのラーマーヤナ」、『思想と文化』ジェンダー史叢書3、明石書店、2010、(pp.188-190)
7. 奈良康明・下田正弘編、粟屋利江、「近代から現代へ」、『仏教の形成と展開』(新アジア仏教史2インドII)、佼成出版社、2010、(pp.333-381)
8. ホミ・バーバ、W.J.Tミッチェル編著、(共訳) 粟屋利江、『エドワード・サイード 対話は続く』、みすず書房、2009
9. アマルティア・セン著 粟屋利江訳 pp.19-70、pp.89-157、pp.217-284、pp.373-419、解説2「ケーララ・モデル」とジェンダーの平等をめぐる pp.613-624、『議論好きなインド人』、明石書店、2008
10. 真島一郎編 鈴木茂『「人種デモクラシー」への反逆—アブディアス・ド・ナシメントと黒人実験劇場(TEN)』、『二〇世紀<アフリカ>の個体形成』、平凡社、2011
11. 鈴木茂、「シネマ・ノーヴォの時代」、『シネマ・ノーヴォ特集』、新日本映画社/エスパース・サロウ、2011 (pp.12-21)
12. 立石博高他編 鈴木茂、『国民国家と市民(「多人種・多文化社会における市民権—ブラジル黒人運動とアフアーマティヴ・アクションをめぐる」)』、山川出版社、2009 (pp.139-162)
13. ボリス・ファウスト著、鈴木茂訳『ブラジル史』、明石書店、2008(総

544ページ)

14. 有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎(編) 橋川健竜、「参考文献」(p.274-350)、「アメリカ史研究文書館案内」(pp.366-376)、『アメリカ史研究入門』、山川出版社、2009
15. 久留島浩・趙景達編 秋葉淳『十九世紀オスマン帝国における改革と抵抗』、『国民国家の比較史』、有志舎、2010

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

http://www.history.l.chiba-u.jp/kaken2008_2010/index.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

小沢 弘明 (OZAWA HIROAKI)

千葉大学・普遍教育センター・教授

研究者番号:20211823

(2)研究分担者

栗田 禎子 (KURITA YOSHIKO)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号:10225261

粟屋 利江 (AWAYA TOSHIE)

東京外国語大学・総合国際学研究院・教授

研究者番号:00201905

鈴木 茂 (SUZUKI SHIGERU)

東京外国語大学・総合国際学研究院・教授

研究者番号:10162950

橋川 健竜 (HASHIKAWA KENRYU)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号:30361405

(3)連携研究者

秋葉 淳 (AKIBA JYUN)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号:00375601